

ウトナイ湖を核とした 勇払原野の保全を

葉山政治

はやま・せいじ
（財）日本野鳥の会レンジャー、
96年よりウトナイ湖サンク
チュアリ、千歳川放水路担
当

本文の要旨

北海道の原風景の一つとしての原野の保全について、見直しが進む苫小牧東部開発の中に残された原野環境の保全を提案するとともに、ウトナイ湖をコアとして、美々川から続く一帯の自然資源としての保全と利用を提案する。この問題は、従来のような反対運動ではなく、自然保護関係者、行政、企業、市民でアイデアを出しながらプランを練り上げていきたい。

原野という言葉は、どんな景観をさしているのだろうか。辞書をひくと自然のままの広い草原となっている。起伏があまりなく、森林でもない環境。当てはまるのは、北海道の平地に成立している湿原ではないでしょうか。かつては、道央圏の石狩低地帯と呼ばれる一帯に分布する泥炭土壌に広くあった環境ですが、現在まとまったものは、苫小牧東部工業基地（以下苫東地区）を中心とした勇払原野のみとなってしまいました。

勇払原野は地形的に見ると、美々川の流れる谷を起点とし、苫小牧の海岸線一帯、東は鶴川付近まで広がっていました。現在は、苫小牧の都市化や厚真、鶴川の農地化によって、美々川流域のから勇払川と厚真川に挟まれる一帯だけとなっています。しかしながらこの域内には湿原環境として、美々川およびその支流の湿原、ウトナイ湖、そして苫東地区に弁天沼、柏原谷筋湿地、平木沼湖沼群、旧安平川氾濫源など様々なタイプのものが存在しています（図1）。

北海道の典型的な景観であり、道央圏に残され

た原野環境は、今保全対象とする時期にあると考えます。現状ではこの地域で法的に保護の対象となっているものは、国設鳥獣保護区のウトナイ湖と、苫小牧市の条例でウトナイ湖周辺のトキサタマップ湿原の一部と南東部砂丘のみです。

美々川流域

九九年七月に建設大臣は、千歳川放水路計画の中止を発表しました。ウトナイ湖の最も重要な水源であり、それ自身も優れた自然環境を持つ美々川は、一応危機から脱したことになりました。今後は、放水路計画が妨げになっていた美々川流域を道条例に基づく自然環境保全地域に指定することが可能となります。

しかしながら、保全地域の指定は、再び先送りになりそうです。それは、放水路中止後の千歳川流域の治水対策を検討する委員会の結論待ちなのです。検討結果次第では新遠浅川の計画が再浮上する可能性が残っているからです。検討委員会は二ヶ年ほどで結論をだす予定で、美々川の法的保全もこの間先送りになるのでしょうか。

美々川自身のもつ自然環境の価値は、放水路に関する各種調査や反対運動の中で一般にも知られるようになってきました。しかしあまり知られていませんが、美々川に注ぐ支流にもペンケナイ、パンケナイ、オタルマップ、トキサタマップなどの湿原が広がっています。今後、保全の対象として目を向けていかなければなりません。

現在美々川流域では、新千歳空港の滑走路延長計画や駒里地域の振興対策などの予定があります。今後の土地利用の動向を見守っていきつつ、検討委員会の推移を見守っていかざるを得ない状態です。

にとつては新鮮な魅力を持つはずで、苦東の工業基地としてのメリットである空港や港に近いという点は、エコツアーにとつても同じメリットになります。自然環境を素材とした観光産業は、今後の北海道を支える経済の柱として有望です。

そのために、例えば放棄後草地を利用して児童を対象にした短期型の宿泊体験施設を作るという案もあるでしょう。情報発信のためのビジターセンターや、一度農地としてしまった湿地を復元することを研究するような施設も立地が考えられます。研究施設とエコツアーのためのサービス施設やスタッフが情報を共有することによっての今までのない可能性もあると思います。復元のための作業に参加すること自身が、貴重なエコツアーのプログラムとなります。苦東に誘致する学術研究施設としては、なにも工業・土木技術のための研究所でなくともいいはずで、

当面留意しなければならぬ点

現在、苦東地区の利用の見直しの意見が各方面から出てきている時期です。また一方では、土地分譲なども並行して行われています。そのような状況下で現時点で留意しておかなければならない点がいくつかあります。

まずは保全対象とする可能性のある場所の周辺の土地利用です。弁天沼と海岸線の間は、学術研究用地となっており、現在熱核融合実験炉の誘致候補地となっている場所ですが、これなどはもつてのほかです。また、保全対象が湿地という事からすると、地下水の低下を招くような行為は慎むべきです。港の掘り込みなどの計画の際には慎重な検討が求められます。

そして最も注意しなければならないのは道路建設だと考えます。苦東の計画自体は現在ほとんど進行していませんが、道路は道道を中心として計画どおり建設が進んでいます。従前の計画どおりでは、保全や利用しようとする自然環境の連続性を損なったり、湿地環境そのものを損なってしまうものもあります。例えば計画では安平川下流の湿地の中に道路の計画がありますが、これは湿地環境そのものを損なうものといえます。このような自然環境に影響を及ぼす行為は、計画の見直しの機運が有る以上は、利用の全体像が描けるまでいったん白紙に戻すべきではないでしょうか。道路は計画次第ではエコツアー等にも有効に使えるものです。今後の利用計画を改めて検討し直す必要があります。

ウトナイ湖をコアとした保全計画

既に述べた二つの湿地の保全を有効にするために周辺との連続性を図ることが望ましいと考えます。ウトナイ湖は、勇払原野の中で最大の沼として、野鳥の会のサンクチュアリーとなっており、国設鳥獣保護区やラムサール条約登録湿地としてウトナイ湖そのものは保全が図られています。では、周辺はどうでしょうか。ウトナイ湖は、勇払原野と呼ばれる一体の自然環境の一部です。

先ほど提案しました苦東地区の湿地は、勇払川によってウトナイ湖と美々川につながっています。勇払川の自然度を取り戻し、美々川自身にも保護の網を掛ければ、川の源流から海に注ぐまで、自然の地形に沿った一連の湿地環境を保全する事が可能になります。ウトナイ湖を中心として、勇水に恵まれ原始河川の姿を持つ美々川や北大の演習

林周辺の山林や勇払川下流の原野、高層湿原的な様相をたもった柏原谷筋湿地など様々な環境の保全は、自然保護のみならず観光や教育といった分野での貴重な資源となると考えます。

現在、苦東を巡る複数の検討機関がありますが、経済的な有効利用という観点からの検討が主体です。自然環境の有効利用も視野に入れた全体の構想を新たな枠組みの中で検討し直す時期になっていると考えます。

原野環境の保全と利用という、基本的な事項を押さえた上であれば、様々なアイデアを盛り込めると思います。これは従来への開発に対する反対運動ではなく、自然保護関係者、行政、企業、研究者、市民などが参加してプランを作り上げていくものだと思います。最近流行の市民参加の街づくりのような仕組みで良いものを作り上げたいと思います。

参考文献

- 苦小牧東部地域に係わる環境影響評価書 平成八年八月 北海道
- 美々川流域の自然環境の資質と現状 平成四年三月 北海道
- 通産省資源エネルギー庁委託調査 環境審査調査(陸域生物調査) 平成十年三月 (財)自然環境研究センター
- 苦小牧東部大規模工業基地に係わる環境影響評価書(資料編) 昭和六一年四月 北海道
- 北海道委託 苦小牧東部大規模工業基地弁天沼周辺地域自然環境調査報告書(植物・動物) 昭和五七年三月 (株)理工学研究所
- 勇払湿原の植物生態学的研究 一九八一年三月

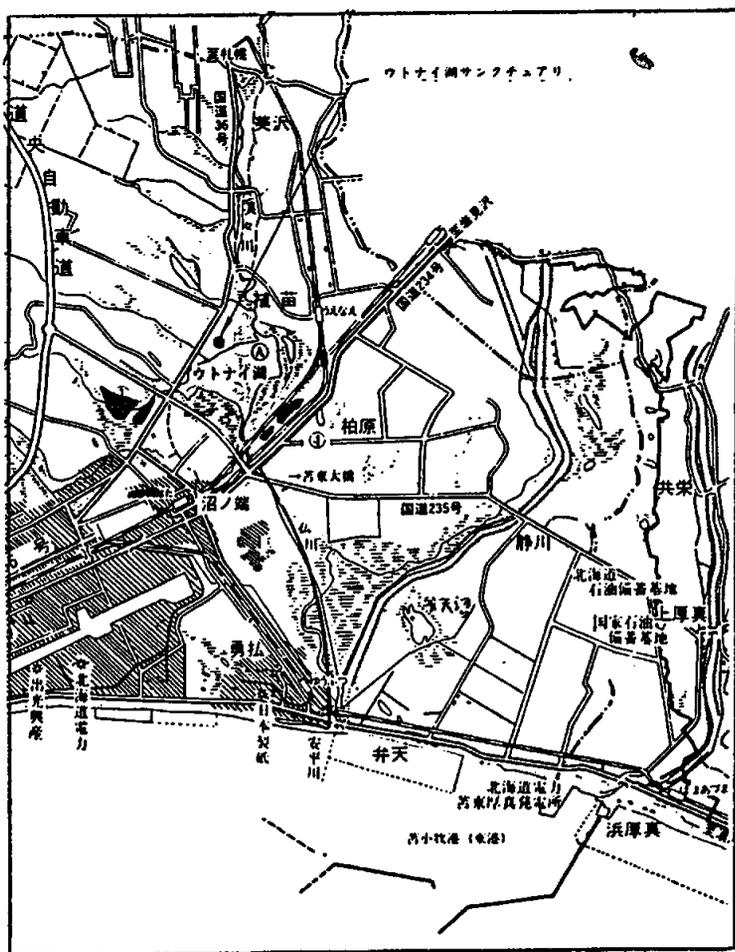


図1 勇払原野（太線内は苫東地区）

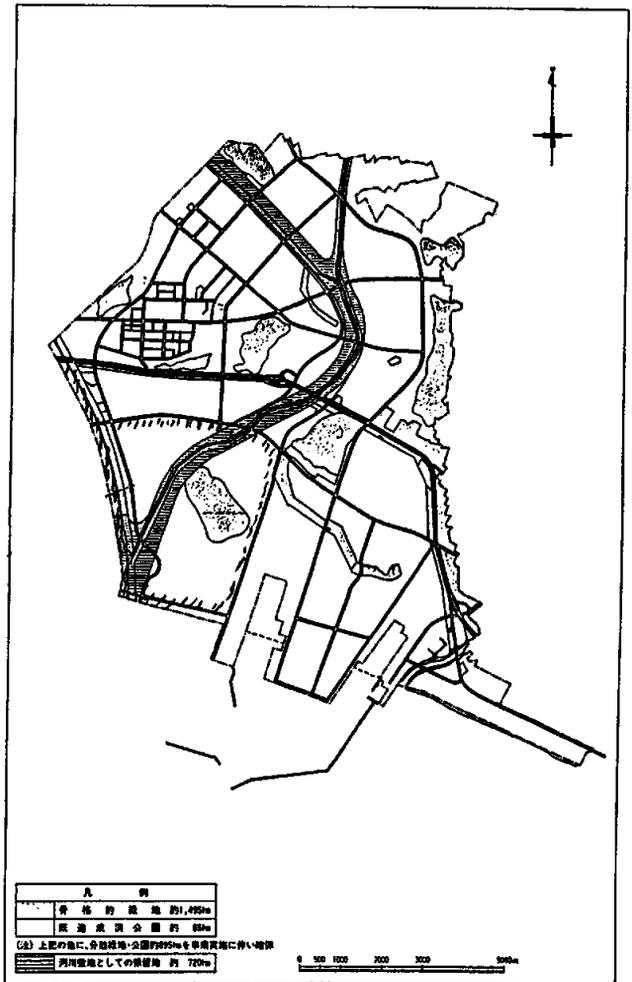


図2 苦東における緑地計画（あみかけ部分は本文の対象原野）と道路計画
（苦小牧東部地域に係わる環境影響評価書より）

表1 苦東計画概要

| | | |
|--------------|---------|----------|
| 総面積 | | 10,700ha |
| 土地利用計画 | 産業機能系用地 | 1,550ha |
| | 学術機能系用地 | 560ha |
| | 都市機能系用地 | 140ha |
| | 基盤施設系用地 | 3,700ha |
| | 小計 | 5,950ha |
| 既存進出企業用地 | | 865ha |
| 既造成（中を含む）の用地 | | 1,651ha |
| 緑地面積 | | 2,390ha |

注) 基盤施設には緑地が含まれる
苦小牧東部地域に係わる環境影響評価書
(平成8年8月)より作成